留学という生き方

改革開放がもたらした異国間のヒトの交流。国の期待を背負って海外留学を果たした初期の留学生たち。まさに時代の申し子ともいえる彼らの今を追う。留学は彼らの人生をどう変えたか。北京の日本学研究センターに集い、八〇年代、九〇年代の留学生たちが語り合う。

徐一平〈北京日本学研究センター長〉×李賛東〈中国農業大学教授〉×陳建軍〈人民網日本版編集長〉×向勇〈隆天国際知識産権代理有限公司副総経理〉×張季風〈中国社会科学院日本研究所研究員〉×益岡隆志〈神戸市外国語大学教授〉　司会　薛鳴〈愛知大学現代中国学部教授〉

薛　中国はつい先頃、改革開放三十周年を迎えましたが、これはいわば中国の若者が大量に留学した三〇年でもあったわけです。今日お集まりいただいたのは、この三〇年間のうちの比較的早い時期に日本に留学し、帰国後中国で大活躍されている方々です。さらに、今日は折よく北京日本学研究センターで集中講義にいらっしゃる益岡先生にも加わっていただけることになりました。私自身も元留学生なので、益岡先生には日本人の視点から質問していただくようお願いします。

タイトルは「留学という生き方」と、ちょっと漠然としていますが、留学は生活まるごとの異文化体験ですから、あまり限定的な表現にしないほうがいいかと考えてこのようにしました。体験に基づいた、しかもかなり個人的なものになるかと思いますけれども、それを通して中国の留学生政策について、日本の留学生受け入れ体制について、あるいはそれらの変化について、どのように見ているのか。あるいは、皆さんのなかには今大学で教えている方もいらっしゃいますが、今の中国の若者は留学についてどう見ているのか、またそのなかで日本留学はどうなのか、中国の社会は今どのような人材を求めているのかなどについても触れていただければありがたいと思います。

◇なぜ日本だったのか

薛　まず、留学という体験は皆さんの人

生で大きな出来事であったと思います。留学によって価値観、またはアイデンティティまで変化があったのではないでしょうか。そこでありふれた質問ですが、なぜ留学を決意したのか、また、どうして日本だったのかについて、まず話していただこうと思います。では、李先生からお願いします。

李　私の場合、実は留学に関して自分で選べる状態ではなかったのです。一九七七年に中国の大学入試制度が回復して、一期生として大学に入学しました。生物関係でしたが、研究書はほとんどなく、図書館にも何もない状態で、しかも英語の先生が途中でいなくなったのです。その頃、私は日本語を少し習っていたので、四年生で留学試験を受けた時、外国語は日本語を選びました。合格して日本に留学することになり、半年間の日本語学習のために大連外国語学院出国人員培訓部に集まった時にどこの大学に行くかは自分で決めました。そこまではもうほとんど成り行きでそうなってしまったという感じです。でもたまたま日本語を習っていたことがすごくよかったと今思っています。

薛　徐先生の場合はいかがですか。

徐　私の留学と、なぜ日本なのかは割と単純です。というのは非常に早い時期に、まだ中日国交回復以前から北京にあった専門学校、北京外国語学校で日本語を習っていました。でもそれは文革前から文革にかけてだったので、そこを卒業してから中学の先生になって、大学に入るとかあるいは留学するとかは夢にも思っていませんでした。でも大学入試が再開されると、李さんと同じように一期生として大学に入りました。大学でも日本語を学んだので、いずれは日本に行きたいという気持ちはあったのですが、八二年、例の大平学校〔北京日本学研究センターの前身。大平正芳首相在任中の一九八〇年から五年間、日中共同事業で開設された現職の中国人日本語教師向けの研修機関で、「大平学校」と呼ばれている〕で一年間勉強してから、大学の推薦制度によって日本へ留学しました。だから、なぜ日本かというと、日本語を習ったからという単純な理由でした。でもそのまま修士、博士と六年間ぐらい留学しましたが、まさに薛先生がおっしゃったように自分の人生がそこで一つの転機を迎えたというのが実感です。

向　私も李さんと同じく一期生ですが、工学を勉強していて、大学では日本語を全然勉強しませんでした。初期の留学の場合、留学する国はほとんど指定されていて、たいてい自分で決めることはできませんでした。私は大学院の入試に通りましたが、初めは日本に行く予定ではなく、イギリスと指定されていたのです。ところがたまたま同じ学校の、日本に行く予定だった一人が病気で行けなくなり、私に「日本に行かないか」という話が来たのです。当時日本語は全然わからなかったのですが、英語もそれほど達者ではなく、じゃあ日本に行きましょうということになりました。

薛　張さんの留学はどうでしたか。

張　この質問は本当に多くの人にされました。でもどう答えたらいいのか。徐先生は単純な理由だとおっしゃいました

が、私もそうなんです。なぜ日本に留学したかといえば、それは日本語を勉強していたからです。日中の国交が回復してから、日本語も学ぶことのできる外国語の一つになりました。一九七三年から七六年ごろでしょうか。桜とか富士山とかが、当時の中国の若者にとって憧れの一つとなりました。また、当時は「四つの現代化」を実現するために、みんな頑張ろう、そのために何か勉強しようということになっていました。しかし当時、私は高校生でしたが、高校は「開門辦学」、つまり学校の門を開いて、実社会、つまり工場や農村へ行って勉強せよということだったので、学生はほとんど勉強しない。そんな中で、うちの父がちょっと日本語ができたので、父について日本語を勉強しました。もっとも、実際は「あいうえお」とか非常に簡単なものしか覚えていませんでしたが。そして一九七八年、ちょうど大学入試制度が復活した直後に受験をして、東北師範大学に入りました。四年間日本語を勉強しましたが、その時には卒業後に日本に留学するなんて夢にも思っていませんでしたよ、相当難しい時代でしたから。卒業してからある研究所に勤め、その後また日本経済専攻の大学院生になり、さらに国家教育委員会にも勤めて、それでようやく日本留学を果たしたわけです。

薛　私たちはある程度、国から留学先を指定されたという経緯がありますが、選択という点で、陳さんは選択の自由のある時代だったのではないでしょうか。

陳　実は、自由というより時代の流れに従った、それだけです。

薛　陳さんはいつ日本に留学したのですか。

陳　九二年です。私の場合、父が日本語を専門にしていて、『北京週報』という雑誌のベテラン編集者でした。小さい頃から、家の中でよく日本語の本を目にしていたので少し興味があったんです。高校卒業時に父が、日本語を勉強すれば将来性があると言ってくれたので、一九八九年に高校を卒業してから、北京でまず日本語を勉強し始めました。その時にちょうど『北京週報』と『人民日報』、

それに日本周恩来記念会というNPO組織が北京で日本語学校を始めていたので、そこで二年間ぐらい日本語を勉強しました。つまり最初から日本へ留学するために日本語を勉強したということです。それから、九二年一月に日本に来ました。その頃はまだ留学ブームが続いていたのです。

◇受け入れ側としての日本

薛　大学院第一期生の来日は八二年で、徐先生は八三年ですね。ちょうど八三年に日本では留学生十万人計画が打ち出されましたが、当時の留学生はまだ一万人にも達していなかった。資料によると十万人に達したのは二〇〇三年のようです。二一世紀に向けての十万人計画は二〇〇三年になって実現したわけです。

確かに、早い時期の留学は自分の選択というより国策だったと言えます。中国も急速に発展し豊かになり、留学は若者の選択肢の一つになったわけですね。一方、日本も変化しています。八〇年代初頭に日本に行った我々の目に映った日本の姿と、九〇年代に留学した陳さん、張さんの目に映った日本の姿と、当然違うと思います。留学に至るまでの経緯が必然にせよ偶然にせよ、それぞれの留学を通して何を求めていたのでしょうか。その求めていたものが実際に日本に行って期待通り得られたのでしょうか。例えば大学の教育内容とか、または日常生活の中で周りの日本人がどのように接してくれたのかとか、強いて言えば、日本の社会はどのように外国人留学生を受け入れようとしていたのか、そのあたりのことを話していただきたいと思います。

益岡　私もそのことに興味があります。八〇年代から九〇年代にかけて日本国内も随分変わりました。日本は経済成長が進んでいましたが、とにかく八〇年代というのはそのピークだと思います。海外からも日本の経済政策が非常に注目されていた。ところが九〇年代に入る頃から経済状況が変わってきて、それが当然、人々の活動に大きく影響を与えた。今日のテーマの留学ということに関しても、もちろん大学の状況も変わってきます。そういうことで、私はぜひその辺のところを皆さんからお聞きしたい。

◇田舎での留学生活の良さ

李　ではまた私から、ちょっと長くなりると思いますがお話ししましょう。私は岐阜大学というすごく田舎の大学を選んだので、日本に着いた最初の日は東京の大使館に泊って、翌日新幹線で岐阜に向かいました。八二年のことです。降りたとたんに、もうすべて自分で何とかしていかなければならなくなりました。最初に学長室に行って、学長から「うちの大学は田舎にあって遊ぶところがあまりなく寂しいところでごめんなさい」と言われたのに対して、私は今とは全然違ったので、「勉強に来ました。遊びに来たのではありません」と強いことを言ったのです。みんながびっくりしたみたいです。その後、そこでの生活が始まったのですが、とても穏やかな田舎で、住んでいるところから大学までは、田んぼと無

人販売の野菜が置いてあるようなところをいつも通っていたんです。あの頃の中国と日本とではあまりにも格差が大きかった。例えばアイスクリーム。中国ではアイスクリームとシャーベットみたいなのと二種類しか見たことがなかったので、初めはスーパーに行っても何を買ってよいかわからない。あまりにも種類が多くて。でもいろいろやっているうちに少し慣れてきました。

最初は大学には他に留学生もいないし、農学部には女性が一人だったので、よく同級生とか前後のクラスの学生が廊下まで見に来たんです。おもしろかったのは大学院の入学試験の時です。中国の大学では、私たち一期生は本もない時代で、私が卒業する頃にやっと生化学の教科書が一冊出版されただけです。四年間ずっと、先生が黒板に書いたものをノートに書き写したものしか持っていませんでした。そのおかげで暗記能力がついて字を書くスピードも速くなりました。それで大学院の入試に、農学部の受験者二九名中、なぜか私が一番になったのです。そうしたら新聞に私の指導教官と一緒に大きく載ったんです。それでみんなが、「まだ日本に来て何か月も経っていない女性に、何で日本の男子学生全員が負けるのか、ちょっとひどい」とか言ったそうです。男子学生からは、「それはたまたまのこと」と言われました。ところがその半年後にもう一回、「生体機構の進化」という科目の試験があって、すごく難しい教科書だったんですが、中国で培った暗記能力をまた発揮して、一人だけ九四点を取ったんです。日本の学生は適当に六〇点取れるくらいまで書くと全員教室の外に出てしまい、窓から私に「何で早く出てこないか」って合図をするわけです。でも私は自分が知っていることを好きに書いて、結局A3サイズで六枚書きました。あとでその解答用紙を教授が私にくださいました。ここまで書いてくれたので、記念にあなたにあげましょうと。そういうことがあって地域で一気に有名になってしまったんです。

李賛東[Li Zandong]・・・日本留学 *1982–1988*

当時は日曜日などになると、地域の中学校や高校に講演をしにまわりました。話はめちゃくちゃでしたけど、それで少し収入があって本をたくさん買えたのが本当に印象的でした。その頃の日本は経済的にすごくいい時期で、田舎には留学生が少なかったものですから、噂を聞いて会いに来る方がお菓子を持って来てくださる。とにかく手ぶらで来る人がいないほど豊かな、日本の一番いい時期に私たちは日本にいたということですよね。

その後のこの二十数年間、年に数回ずつ日本に行っているんですけど、あの時とはまったく違いますね。あの頃は東京に行って電車に乗ると、みんなブランド

の服を着ているので、いつも私だけがすごく目立ったんですね。今は電車に乗ってもそんなことはないです。日本人も、なるべく簡素な生活をするとか、食事やお土産も最低限にするとか、カジュアルな生活に慣れてきたような、そういう部分が見えてきました。でも私は当時付き合った人たちとは、三〇年近く経った今でも変わらず、ずっとつながりを持っています。生活も研究もすべて日本の先生と友人たちにおんぶする形で最初の一〇年間を過ごしました。ですから私にとっては、田舎に行ったことはすごくラッキーだったのです。

益岡　李さんの場合、ご自身を形成される上で日本への留学は大きかったということですね。

李　ええ、あの時、日本語が下手で、お金も友達もなかった私を、日本の一般市民や同級生たちが大事にしてくださったのです。今、家に小さな鏡が一枚あるんですけど、同級生のお母さんがくださったものです。決して裕福ではないその同級生は、お母さんから送られてきた茶碗とか鍋とか、いろんな生活用品を私に分けてくれたのです。そのお母さんにお会いしたことはありませんが、今も家の自分の机の上に置いてある鏡はその時にもらったものです。

◇大学での教育方法の違い

徐　我々の世代が留学したのは八〇年代の初めごろ。もう二十数年前のことですが、今から考えると本当にいろんな違いがありました。大きく言うと、大学の教育方法の違いと生活の違いの二つがあると思います。

まず、大学の教育の違いというと、今ちょうど李さんが言ったように、中国の今の教育にもまだそれが残っていると思いますが、割と「鵜呑み」するのが速いんですね。暗記とか先生が話したことをメモするとか、そういうのがみんな上手で、逆にゼミ方式で自分の意見を発表するのは今一つでした。

我々はまさにそういう時代に育った世代ですから、私の記憶の中では日本の大学の講義では、先生は大体教科書を使いません。私の神戸大学での先生（後に東京大学に移られた）が言うには、本とか文章になっているものは自分で読めばいいのだから、授業で話すのはまだ書いていないものだ、と。まさに益岡先生がこのあいだ北京日本学研究センターの公開講座でおっしゃったように、検討中とか準備中のものを授業でやるんですから、一生懸命メモを取るほかないわけです。一生懸命メモを取っていたら、その先生は――最初は留学生にあまり期待していなかった先生ですけど――学期がそろそろ終わるというころに私のメモを見てびっくりして、そのメモはこのまま講義ノートになる、これのコピーをくださいと言われたんです。

もう一つ、なぜか当時の中国では試験の答案でも鉛筆を使っちゃいけなかった。みんなボールペンで書くんですね。ボールペンで書くと直せない。でもそれに慣れてしまっているんですね。日本の学生は試験では鉛筆で書かないといけない。鉛筆で書いたものはまた消して直し

たりできますが、ボールペンで書くと後で消せないし、無理に消そうとすれば汚くなる。それでその先生はまたびっくりした。この徐さんは答案をなぜかボールペンで書いて、しかも一つも直さずに提出している。そういうことで、その先生の我々留学生に対する見方は大分変わりました。その後、その先生はたくさんの留学生を受け入れて、今でも留学生の指導に熱心です。いわゆる詰め込み教育に慣れていた当時の中国人留学生をまず知ったというわけです。

反面、ゼミ方式の授業で発表するとなると非常に不慣れで、どういうものを発表しようか、いつも発表の前は悩みました。でもゼミの中で繰り返し先生にたたかれて、また周りの学生たちに助けていただいて、少しずつ成長したのだと思います。今の我々のセンターの学生もそうですけど、日本に行って何が一番大きな収穫だったかというと、ほとんどがゼミで勉強したことだと言う〔北京日本学研究センターの修士学生は、半年間日本の大学で学ぶことになっている〕。講義形式の授業はどうしても大きい教室になってあまり付き合いもないし、むしろ孤独感があるんですけど、ゼミに入ると一緒に発表したりして、発表が終わってから酒の好きな先生たちと一緒に飲みに行く。ある先生が言うには自分の授業を聞くより、一緒に酒を飲んだ方が成長が速いと。そういうふうに先生と本当に身近に付き合いながら、先生の考え方を少しずつ身に付けていき、修士論文から博士論文へと少しずつ考えを深めていったのです。そのような教育面の違いは今でもまだあると思います。当時我々にとって本当に新鮮でした。

徐一平〔Xu Yiping〕‥‥ 日本留学 *1983–1989*

ゼミ方式の授業は、おそらく留学から帰ってきた皆さんも今、なるべく自分の授業に取り入れて学生を育てているのだろうと思います。まだ中国は講義形式の授業も多いので、完全には変わっていないが、少しずつ変わってきている。これは我々が留学のなかで得た教育方法の面での一つの収穫だったと思いますね。

二つめに、李さんと同じようにやはり生活面での違いです。私は中国に帰ってから一九九八年頃にもう一度国立国語研究所に行きました。我々の学生が日本で半年の研修をするので、その最初に行われる研修のオリエンテーションに付き添っていったのですが、学生は一週間日本に滞在して東京の街を歩いていても、日本に来た感じが全くしないと言うのです。つまり、その頃には北京と日本とは本当に近づいてきていたんです。しかし、我々が行った八〇年代の前半は、中国ではスーパーを見たこともなかったし、買い物の仕方もわからなくて、いわゆるカルチャーショックは大きかった。

ただ一つありがたいと思うのは、当時ちょうど日本はバブルの最中で、多分日本人が一番自信を持っていた時代だったと思います。それから日本は国際化を大きく叫んでいた時期だったので、人々のなかには日常的にもなるべく留学生を助けたい、留学生を援助することによって自分たちは国際化しているのだというような意識があったようです。我々が苦労している時に、いろんな組織が支援してくれました。神戸で言えばＹＷＣＡやＹＭＣＡなどでは一生懸命ホストファミリー制度を作っていました。その時に知り合ったホストファミリーは、まさに李さんと同じで今でも付き合っている人が多いです。

ただおそらくバブル崩壊後、あるいは中国の私費留学生がどんと増えてから、むしろ中国人留学生と聞くと敬遠する、そういう状況が出てきているようです。それでは留学生三十万人計画はなかなか実現できないと思います。国が政策を作るだけではなくやはり市民レベルでの対応が必要ですね。留学生の中には何らかの原因で悪いことをする人もいるかも知れませんが、大多数の留学生は熱心に勉強して、我々と同じように日本に学ぼう、あるいは日本での経験をどこかで活かそうとして日本へ行くのですから、あの頃と変わらぬ温かい気持ちで受け入れていただいたほうが、現在の留学生にとっても、将来の留学生にとっても相当良い影響があると思います。我々の思い出は、ぜひ今後も続けていってもらいたいというのが今の気持ちです。

益岡　教育の部分での日本と中国のやり方の違いというのは、聞いていてなるほどと思いました。私は七〇年代に大学で教育を受けましたけれども、やはり少人数教育という場で教育を受けたことがある。少人数教育ということで、確かに学生と教師とのあいだの積極的な議論というのがあって、一方的に話を聞くということがまずなかった。むしろ学生がどれだけ発言するか、そしてそれに対してどれだけ教師の方がコメントできるかということが問われていたように思います。それは最近始まったことではなくて、私の世代ですと普通の風景であったように思います。お話をお聞きしていて、中国は今は変わってきているとは思いますけど、その当時の中国と日本の教育のやり方、特に大学レベルでの教育内容の違いは印象深いものがあります。

◇違いから見出した価値

向　私が行ったところはもっと田舎なんです。秋田大学。なぜ秋田大学を選んだかというと、それは単純で、私は中国で石炭関係の勉強をしていましたが、日本でその専門があるのは唯一、秋田大学なんです。中国では炭鉱の自動制御を勉強していたので、秋田大学の鉱山学部〔当時。現在の工学資源学部〕に行ったのですが、当時はセンサーというテーマへの取り組みは始まったばかりで、実験設備もあまりなかった。そこで半年間ぐらいふらふらして何もやらなかった。いろいろなところをまわっているうちに、たまたま同じ鉱山学部の鉱山地質学科の先生と知り合って、一九八三年に日本海中部

地震があった時、私はその先生と一緒に地震調査に行きました。これはおもしろいと、採鉱学科から地質学科に移って、地震探査の技術がテーマになりました。先生にいろいろと教えてもらったなかで次のようなお言葉があります。一生懸命やれば一見簡単なところにも理論が生まれる。実験は単純だが、実験に関わった理論は奥深い。その教えは今でも私に大きな影響を与えています。

生活面で言えば、当時二人の日本人学生と郊外の一軒家を借りて一年ほど一緒に住んでいましたが、三人で一万円ずつ出しあって、晩ご飯は一緒に作って食べるという「共産主義的」な生活でした。お陰で日本語を覚えたし、日本人の考え方もいろいろ知ることができました。今でもこれは活きていると思います。

秋田大学には博士課程がなかったので、修士の後、静岡大学に移りました。静岡大学には鉱山関係のところがなく、もともとの専門が工学だったので、医用電子工学について研究するようになりました。わかりやすく言うと人間の癌を治す機器を作るというのがテーマでした。私はいつも、日本で一番複雑なものを二つ勉強したと言っています。一つは地球内部の探査、もう一つは静岡で勉強した人体内部の探査。とは言え、テーマが何回も変わったので、深くは勉強していません。けれども、今、知的財産権関係の仕事をする上で、これらの経験は非常に役立っています。

日本で勉強していた時、私は教科書について一番深い印象を受けました。日本の教科書はほとんど百科事典のようで、何でも書いてある。しかし中味はそれぞれが非常に短くて、そんなに深くは触れられていない。中国の教科書は厚いだけに非常に細かく書いてある。そしてアメリカの教科書を見ると、同じ問題を違う側面から考える、つまり多面的に書いてある。三か国の大学教科書の使い分けを私なりに考えるとこうなります。もし初めて勉強するなら、日本の教科書で勉強する。全面的に少しずつ掴むことができる。もし独学するなら、中国の教科書を選ぶ。非常に細かく書いてあるから。しかし、理論的構築は、やはりアメリカの教科書でなければならない。日本で教科書を見て、そんなことに気がついたわけです。

向 勇[Xiang Yong] ‥‥ 日本留学 *1982–1988*

日本の現在の教育についてはあまり詳しくありませんが、最近、私が特に感じているのはこんなことです。仕事柄日本語を使うことが多いので、よく日本から帰国した留学生がやってくる。ところが最近、日本で三年間マスターで勉強して帰ってきたのに、日本語があまりわからない。それにちょっと驚いています。同じ研究室に中国人留学生が多いためか、

学生と先生の間のコミュニケーションは英語で済ませてしまうことが原因として考えられます。それで日本に三年間留学していても、日本語はそれほどうまくないわけです。

徐　英語でする授業が増えたんですか、特に留学生に対して。

益岡　言葉の問題に関してはご指摘のとおりだと思います。特に理系の場合は、専門にかかわるコミュニケーションについては日本語を使わないで、具体的には英語を使ってということです。もう一つはこの後のテーマになると思いますけど、少人数なのか多人数なのかということは、教育だけではなく生活面や交流の上でも随分影響が大きくて、違ってくる。ごく少人数でやっていくと、非常にコミュニケーションがうまくできるというのは確かでしょう。細かいところまで目が行き届くといいんですけど、絶対的な数が多くなってくると、いろんな面での違いを生んでくるのでしょうね。

薛　最初のころは留学生が少なくて本当に大事にされていた。大事にされすぎるぐらい。今は留学生が増えて、もちろんいろいろな留学生政策が出されて進歩していますけれども、一つの教育機関としてケアが行きとどいているかどうかという問題と、留学生自身の心のケアの問題もあるかと思いますね。それに、留学生同士がかたまってしまって中国とあまり変わらない生活をしていると、日本語があまり上手にならずに三、四年間の留学生活を過ごして中国へ帰ってきても、その日本語が本当に使いものになるかどうかが問題ですね。

益岡　例えば日本からの留学生にも同じような問題がありますね。少人数で出かけていた昔の世代と、現在のように非常に多くの人が行くという時代ではまったく条件が違うでしょう。

◇違いがなくなった中国と日本

張　異文化体験とか、中国とどのような違いがあるかとか、第一期生のほうがすごくあったと思うんですけど、私の場合になるともうほとんどないんですね。

薛　張さんはいつ頃留学したのですか。

張　一九九四年です。九四年に私は日本に行きましたが、その当時も今も、一番困ることは何も特別な感じがしないことです。私は大学を卒業した八二年から、訪問学者として仙台にある宮城教育大学で半年間の共同研究をする九二年まで、日本には行ったことはありませんでしたが、日本と関わりのある仕事をしていました。八八年、八九年頃に大学院に入って、戦後からバブル時期までの日本経済をずっと勉強してきました。テレビなどのメディアも相当発達していたので、日本はそれほど珍しいとは思いません。大学院を卒業してから、国家教育委員会に入って、さらに頻繁に日本人と付き合うようになり、日本からのお客さんを空港で出迎えたり、見送りしたりしていると、日本までの距離はほんの一歩と感じる。あと一歩で飛行機に乗れば、すぐ日本へ行けるから。だから最初に日本に行った時、ああこれがテレビや新聞で見たことのある新幹線だ、高速道路はこんなふうで中国にもある。バブル崩壊後の

日本経済も予想してきた通り。だから、最初の一〇日間は、北京とそんなに変わらないという印象でした。

徐　さっき九八年に学生に付き添って東京の街を歩いたことを話しましたが、私がびっくりしたのは、学生が発した「東京は安い」という声です。店頭に出してある例えば化粧品。大体日本では安いものを店頭に出してあるんですね。中国では店頭の化粧品も輸入品だから、高いイメージがあるんです。その値段から見ると東京の方が安い。我々が留学した当時は、我々の収入の感覚からいくと、何を見ても日本の方が高かった。九八年になって学生が見た東京は安いという一声には本当にびっくりしました。

張　私の留学先は東北大学です。仙台の、魯迅が留学した大学です。しかも仙台は私の故郷の長春と姉妹都市なんです。テレビや新聞で得た日本のイメージと、行ってみた日本とはそんなに変わらない。留学から帰ってきた今でも日本には年間数回、多い時には一〇回も行く機会がありますが、日本に行っても特に何も感じない。鈍感。これは本当にまずいなあと思います。私の勤務している中国社会科学院日本研究所には、私と同じような人がたくさんいます。

授業の面では徐先生のおっしゃった通りで、ゼミ形式は中国の院生時代にも若干やっていたんですが、日本ほどではなかった。教育の面で一番印象深いというよりむしろショックだったのは、中国と日本との研究の違いです。私が日本で大学院博士後期課程を受験した時、まず中国の大学院の修士論文を審査されました。私の修論のテーマは「中日における産業構造調整比較に関する研究」です。当時、中国人の観点からすると相当いい論文だったらしい。それをもとに書いた論文を中国の雑誌に発表したところ、中国の若手経済学者優秀論文賞の三等賞を李鵬首相の出席のもと人民大会堂で受賞したんです。ところが、日本で指導教官から「正直に言うとお前の修士論文では不合格だ」と言われた。それはもうびっくりしました。ショックでした。中国では賞をもらった論文が、日本ではなぜ不合格なんだ。かなり不服でした。でもその後、日本で勉強をして、ことに博士論文を書くための三年間は現地調査をしたりして、日本の研究手法を身につけた今の私の目から見ると、やはりあの修論は不合格ですね。

張季風[Zhang Jifeng]‥日本留学 *1994–1999*

益岡　留学に付きまとう問題として、専門教育を含めた教育研究では、留学当初はある程度、留学生の背景を考慮に入れるか、その国の学生と同じ目で見るかどうかという問題があります。今の時代になってくると、いい意味でかなり平等に見ているということなんです。文科系と

理科系とでは完全に同じではないかもしれませんけど、全体の傾向としてはだんだんと特別扱いをしないようになってきています。ある意味では厳しい目で見る部分も教育や研究の面では出てくるかもしれません。

◇留学生の間の「格差」

陳　私は九二年一月に私費留学生として日本に行き、最初の一年間は日本語学校で日本語を勉強しました。一年後に大学の入学試験を受けました。その時に気づいたことは、日本の受験制度では各大学が別々に試験をやっている点で、中国と全然違うということです。そこで私は二、三校の大学を受験して、東京の城西大学に入学しました。九三年のことです。城西大学の経済学部に入って四年間勉強しました。私費留学生だったので、アルバイトをしなければなりません。私はずっと東京の巣鴨に住んでいましたが、ほぼ毎日巣鴨から城西大学のある埼玉県の坂戸まで通っていました。すごく大変だなあと感じていました。

陳建軍[Chen Jianjun]・・日本留学 *1992–1997*

李　私費留学生の典型的パターンですね。

陳　その頃の私費留学生はほぼみんなバイトをしていました。そのうち留学生の人数が多くなり、大学に行くと、いつも留学生同士で行動していました。授業の時もみな前のほうの席に座って、試験になると、一部の日本人の学生は不合格の科目も時々ありましたが、留学生はみな少なくとも合格レベルだったんですね。日本社会が豊かになって若者に頑張る気がなくなったせいじゃないかと思います。

アルバイトは、ずっと巣鴨で新聞配達をしていて、新聞販売店のアパートに住んで食事も朝晩とも店でとれる。それで住むところと食事のことはあまり心配しなくていい。また新聞販売店の人が私以外は全員日本人で、みなと交流する時間が多かったんですね。それがよかった。

益岡　直接的、日常的な交流が大事なんですね。他の場では得られない経験ですから。本を読んだり、今はインターネットの時代ですから、情報はあるんです。もっと直接的な経験が大事ですね。それから今お聞きしていると、私費留学というのはやはり九〇年代から大分増えてきたわけですね。

徐　八〇年代中頃までは私費留学はできなかったんです。八五年以降、だんだん増えてきた。

益岡　九〇年代になると随分増えた。

薛　一番多い時でしょう。

益岡　それも一つの大きな違いなのかな。今もずっと続いている傾向だと思いますね。

張　国費留学生は裕福で「貴族」と呼ばれ、私費留学生は「貧乏人」とでもいう

か、かなり違いますね。

薛　格差というのを体験したわけですね。

張　格差はその頃から生まれたんですよ。

徐　特に当時の中国からの私費留学には仕送りができませんでした。今の親は外貨を自由に両替したりして仕送りができます。でも、九〇年代は家から仕送りができず、自分で稼がないといけない時代だったんです。一番苦労した時代だと思います。

張　徐先生の八〇年代前半から一〇年経って、九〇年代の前半になると変わってくる。さらに一〇年経った二〇〇〇年代はどうでしょうか。

徐　この席にはその二〇〇〇年代の代表はいないんですね。残念ながら。

李　去年、今年と日本に行きましたが、どの飲食店に入っても中国人に会わないことがなかったです。

薛　そうですね。いたるところで外国語が耳に入ってきますが、すれ違うとよく中国語が聞こえてきます。

◇生活した地域による差異

薛　留学した時代や国費か私費かという違いに続いて、留学した地域による違いについてはいかがでしょうか。

陳　残念なことに私はずっと東京に住んでいたので、地方を知らないんです。

李　私は岐阜大学と九州大学でしたが、その後、早稲田大学に三か月行っている時に石神井公園の近くに泊っていたときのことです。タクシーを呼びたいとか何かを聞いても、「こんにちは」と言っても誰も相手にしてくれなくて、その話を東京に住む友達にしたら、実はあなたが聞いた人たちも地方から来た人だったりして、東京の人じゃないんだよって。そういうことがあるかもしれません。

益岡　東京に日本全体がだんだん近づいてきてはいますけれど、それでもまだ地域によって随分違うということですね。例えば留学して東京だけを見て、それが日本のすべてかというとちょっと全体を見たことにならないということが言えるかもしれない。ですから東京に行く留学生が多いとは思いますけど、なるべく他の地域も見ていただければよいと思います。

向　田舎だから朝が早く、学校へは住んでいるところから歩いて行ける。歩いていてちょっとおばさんに出会ったら、みんなが「おはようございます」って声をかけてくれる。大都市だったらこういうことは考えられませんね。

張　日本の昔の風景のようです。今ではなかなか見られません。私の留学先の仙台では人々は魯迅先生を誇りに思っている。私もそのお陰で周りの人に本当に親切にしてもらいました。その親切さは、先ほど徐先生のお話にも出ましたが、とても懐かしい。その時に知り合った友達とは今でも付き合っているんです。非常に美しい印象です。第一期生の時は留学生が少なかったし、みんなすごく優秀だったから尊敬されていた。でも私の時代になると、むしろ敬遠される。とにかくそういう時代になったんです。しかし、仙台は東京と違うんです。秋田や仙

台などの東北地方は、気候的には寒いけれど人の心は温かい。とても純朴でその温かさに感激しました。

益岡　日本は一つじゃないということですね。今は世界的に情報その他を共有していく傾向が強い。いわゆるグローバル化ということですけど、それにもかかわらずやはり日本の中でも地域間の違いは大きい。東京に代表されるような大都市の場合は、中国も含めて海外との共通の面というのが非常に早く出ますね。でも日本全体がそうかというと必ずしもそうではなくて、各地の様子は東京と同じではないところもあるんじゃないかという気がします。先生方がそれぞれ研究された、あるいは教育を受けて来られたそれぞれの地域の様子がうかがえて、大変興味深く感じました。

◇変化する日本社会の中の留学生

薛　留学体験というのは、ただ教育機関で教育を受けるばかりではなくて、日常的に日本人と接している中でのいろいろな経験も含まれています。少し前の調査ですが、滞日期間が長くなればなるほど、外国人に対する日本人の態度についての留学生の満足度が下がるというのを見たことがあります。[1] 今、お話を聞きまして、今でも留学生時代の日本人の友人と付き合っているという皆さんにとっては必ずしも満足度が下がったわけではないような気がします。

徐　滞在した時期とも関係するのではないでしょうか。日本も八〇年代から九〇年代以降の変化、特に二〇〇〇年に入ってからの変化は大きいと思います。我々の世代は日本のバブルの最盛期に来日し、ちょうど日本の「国際化」の時代だったんですね。それからもう一つ、当時留学生が少なかったために珍しい存在として付き合ってくれていた。

　その後、日本はバブルが崩壊し、いわゆる「自信喪失の一〇年」となり、それに対して中国はいわゆる「成長する一〇年」でした。さらに八〇年代前半までは国費留学生しかいなかった。国費留学生はエリートとまではいかなくても、ある程度の選抜を経て来ていた。生活の不安もなく勉強に専念できたグループだったかもしれません。その頃の日本人から見ると、中国の留学生はみんな優秀だったんですね。一方、日本の学生は、陳さんが言ったようにだんだん勉強しなくなっていた。それに対して、中国人留学生は一生懸命勉強している。苦労はしているけれど、みんな勉強するしかなかったので、優秀だったんです。

　ところが九〇年代前半になると、今度は国費留学生が少数派になって、私費留学が増えてきた。それに伴って、いろんな目的で日本に来る人が増えてきたんです。本当に勉強したい人もいれば、お金を稼ぎたい人もいる。それから、私費留学生だから必ずしも奨学金が保証されてはいない。自分の生活費も稼がないといけないとなると、学業との両立は非常に難しい。そうすると日本人からみて、中国の留学生が必ずしもみんな優秀なわけではないということになり、さらに留学生がらみの事件が起きたりするとまたマスコミが大々的に報道する。つまり、日

本のバブル崩壊ということと、留学生の質の変化ということがあって、留学生に対するイメージが大きく変わってきているのではないでしょうか。

張　徐先生のおっしゃる通りで、日本も変わっているし、中国も変わっている。そういうことは一律に言うのは難しいと思う。個人差もある。例えば私自身について言えば、日本留学中ずっと仙台に住んでいましたが、不満はほとんどなかったですね。

薛　その調査は、滞日期間を四年を上限にしたものですが、お互いにあまり知らないうちは礼儀正しく接してくれる日本人に好感を持っていたのが、もっと親しくなりたいという留学生の期待になかなか応えてくれないという失望感に変わったのかもしれません。日本では「親しき仲にも礼儀あり」という言葉がありますが、文化の違いということも考えられます。しかし、皆さんの話を聞きますと、満足度が下がったということはあまりなかった。これは具体的な状況が違うということで説明できるかと思いました。

益岡　いろいろなことが要因として関係してくるのでしょうね。ご紹介された調査結果というのもわかるような気もします。薛先生がおっしゃっているように、つまり日本の場合は割と人との付き合い方、特に外から来られた人との付き合い方に関して、最初はかなり距離を置いて、ある意味では親切にという部分があるんですね。ところが、だんだん時間が経過してくると、少しその辺の付き合い方が違ってくるということがあるかもしれません。ただその他の先生方がおっしゃったような時代の状況や、日本だけではなく中国の変化ということもあるかもしれない。そういうことが非常に複雑にからみあっているので、簡単には言えないかなと思います。

益岡隆志[Masuoka Takashi]

　また、日本の今の時代の人々の意識や感覚というものが随分変わってきているということは、あとでもう少し話題になるかなと思っております。私の印象では、日本は国際化ということを言いながら少し内向きになっている。自分たちの内部、あるいは伝統的なものを少し見直そうというような動きがあるような気がします。その一方でグローバルな時代ですから、経済などはまた別の動きをしているわけですが。

李　一言でいうと日本人は本当に親切です。帰国後も日本に行くたびに親切にしてもらっています。私が現在留学生にしてあげられることより、日本に留学した方がはるかに面倒をよく見てもらえると思います。

益岡　時代その他で変わってくる部分と、文化として変わらず残っていく部分がありますよね。だからおっしゃったよ

うな面倒見のよさというのはあまり変わらないで今でも残っているのかなという気もします。いろんなことが関係してくるから、当然変化する部分もある一方で、割と日本人というのはそういう点では丁寧に親切に接するという部分が今でもまだ残っているかなと、これは希望でもありますけど。

◇帰国後の活躍の場

薛　ここまで留学中の話をいろいろしていただきましたが、ご自身の留学の体験は、中国に帰ってからの人生にどのように影響しているのでしょうか。今までのお話の中にも随所に出ていましたが、とくに留学経験が今の仕事にどのように活かされているのかをお話しいただきたいと思います。

李　私は生物学の専門だったので主に実験室にずっといました。中国ではピペットなど見たこともなかったので、留学した当初はすごく大変でしたが、その環境に慣れて、六年経って中国に帰ってみると、実験設備などがほとんどもとのレベルまで落とされることになりました。ピペットで何百個も処理していたのが、何もなくてすべて自分でセットアップしなければならなかったので、一日に予定していた半分もできなかったりして、本当に苦しい思いをしました。そんな時、早稲田大学のある教授にその話をしたら、物がない時は頭を使いなさい、よく考えれば何かできることがあるだろうと言われて、考えながらできることから行動を起こすようにしたんですね。日本人はいつもまずやってみるという、小さなことから、今できることから行動を起こすという精神を持っていると思います。帰国して二一年目に入っています。

薛　もう二一年目ですか。

李　それほど成功したとも言えませんが、それほど悪くもない。自分の分野では中間より少し上のレベルだと思います。帰ってきた最初の頃は、日本の先生たちが航空便で試薬などをよく送ってくれました。とにかく今すぐ欲しいものがあってもお金がないし、お金があっても手に入らない試薬などを、先生たちがいつも送ってくださいました。すごく感謝しています。

薛　留学経験があってこそ、そのつながりをもって日本からいろいろ支援してもらえたのですね。その実験設備の面で今では日本とそれほど差がなくなったのですか。

李　生物学の面で北京大学やうちの中国農業大学のキーラボなどはそれほど変わりませんが、手頃なものが少ないんです。大きい機器はすぐ入りますが、一番原始的なものから一番新しい機器の間の、使いやすい道具が足りない感じです。中国に帰ってから、九一年頃に変な、どう活用したらよいのかわからないような国産のコンピュータが出されたんですが、一台目は買ってもあまり使わないまま壊れてしまいました。それから四、五年ぐらい経ったら、ほとんどの教員のところに一気にコンピュータが普及したような感じです。それは中国での開発や検証の過程を経ずに、海外から入ってきたものをそのまま組み立てたもの

だったんです。研究室もそうです。すごく新しいものとすごく古いものが混在して、真ん中が抜けているような感じが今でもします。

徐　私は今、北京日本学研究センターで仕事をしていますから、留学したことは多分すべて日常的に活かされています。帰ってからすぐこのセンターに戻ったわけではなく、八九年から九四年まで北京外国語大学の日本語学部で日本語の教師をしていました。留学経験は教育の面でかなり活かされました。当時まだ中国では日本に関する資料はそれほど多くなかったので、授業中、日本で集めた本や写真集などを教室に持ち込んで活用していました。その後、センターに移ってからは、もちろん日本側の先生と協力しながら、自分の留学中に得たものすべて役立っているというのが実感です。

薛　向さんの今のお仕事は日本と関係がありますか。

向　関係あります。私は帰国後、中国科学院電子研究所に勤め、当初はその第一研究室で日本で勉強したテーマに近い研究をしていました。今は留学生が帰国すると国からドーンと研究費が与えられますが、当時は国からの研究費はそれほどもらえず、自分で獲得しなければなりませんでした。そのため、一年ほどで研究室を移り、テーマも企業の技術開発に変えることになりました。企業に技術協力をするなどした、その間の一〇年ほどは、日本語を使う機会はほとんどありませんでした。その後、科学技術管理処処長という管理職もやりました。さらに研究所付属の企業の総経理も務めましたが、会社の経営があまりうまくいかなかったので、二〇〇三年に今の仕事に替わりました。隆天国際知識産権代理有限公司です。

薛　自分で立ち上げた会社ですか。

向　いや違います。この会社に入社する前は、知的財産権についての知識はほとんどなく、素人から入ったんです。私が持っているものは日本語と技術です。二〇〇三年に入社して、一から一生懸命勉強して、会社のトップに立ち、日本人の担当、つまり日本企業のすべてを私が担当することになりました。もし、留学していなかったら、今の仕事はできなかったでしょう。また先ほども言いましたが、日本留学中は生活の不安がなかったので一生懸命勉強しました。留学でしっかりした基礎ができたからこそ、今の仕事ができるわけです。六年間悔いのない留学生活でした。それがあってこそ今の自分があると思います。

薛　日本語能力や学んだ専門知識、あるいは鍛えられた精神力や身に付いた考え方など、多面的ですが、今も活かされているというのは、学問を含めた総合的な

薛 鳴[Xue Ming]……日本留学 *1982–1988*

経験ということなんですね、どなたにも言えることだと思いますが。

向　そうですね。今の私の仕事は、かなり技術の方に関連していますが、もちろん日本語も役立っています。私は日本のお客さんに対応する全般を任されているので、やはり日本人と接する際には留学を通してわかった日本人との付き合い方がたいへん役立っています。

張　私の場合、日本留学で得た最大の収穫は、日本で学んだ研究方法と言えます。中国でも一九八二年から九四年までずっと研究をしていましたが、研究方法というものはあまりわかっていなかった。ところが日本でのただ四年間の勉強で、研究とは何か、研究手法はどういうものがあるかなどの基本を身につけて、それがまた自信につながりました。

それまでは、研究していても何か心細い感じがしていました。どこから着手してどうやればいいか、ほとんどわからない。いろいろ資料を調べて、まとめて、コピーしたり書いたりするぐらいはわかっていたけれども、自分の指標や主張、特徴などはほとんどありませんでした。留学して最初に先生から言われたのは、まずデータを自分で取ること、例えば現地調査する、または現地調査による生の資料の分析をするということです。中国では例えば、経済を研究するなら『中国統計年鑑』のデータを使ったりしますが、まずそれに頼らず、最初から自分でデータを作ってみる、自分で現地調査をやってみる、という先生の教えに従って、中国の吉林省で四三の郷鎮企業をまわってデータを集めました。その結果、『中国統計年鑑』のデータとはかなり違うことがわかりました。

そういう手法を身につけてから、九九年の末ごろ中国社会科学院日本研究所に入りました。これは国務院、つまり中国政府のシンクタンクで、エリートの集まっている研究所なので、入ってからやはり大変でした。でも日本で学んだ手法が研究で活かされていることに感謝しています。私がやっている仕事は基本的に日本のマクロ経済の研究と日中経済関係ですが、そのほか、三、四年前から全国日本経済学会の事務局長もやっています。それで、中国全体における日本経済の研究をさらに前進させることが私の責務になっていますが、研究所でも学会でも、あるいはもっと広い範囲で研究したりシンポジウムを主催したりする時も、留学中に得たものはたいへん役に立っていると思います。

薛　陳さんはマスメディア関係、『人民日報』の「人民網」(人民ネット)日本語版編集長ですね。もちろん日本語が大変役立っていると思います。そのほかに何か日本の経験で役に立ったとか活かされているということはあるでしょうか。あるいは戸惑いを感じたことなどがあるかどうか、お話しいただきたいと思います。

陳　私は日本語を勉強していなかったら、もしくは日本に留学に行っていなかったら、今の仕事には就いていなかったと思います。今ご紹介くださったように、私が働いているところは『人民日報』のネット版、「人民網」日本語版で、日本の読者向けのニュースサイトです。私たちは毎日、中国のサイトから日本の

読者に合う内容を考えて中国の記事を選び、日本語に訳してネットに掲載するわけです。だからもちろん日本人と関係する仕事をしています。またほかにも中日交流の会議やイベントに時々取材に行きますので、そういう場でも日本語を使っています。ただ普段はあまり日本語を話す機会が少ないのが非常に残念です。

薛　日本の新聞記事を中国語に訳したりもするのですか。

陳　それもあります。うちの部では中国のことを日本に紹介する日本語のサイトと、もう一つは日本のことを中国に紹介する中国語のサイトの二つがあります。

薛　両方やるんですか。どちらの比重が大きいですか。

陳　やはり日本語の方が重要視されています。

薛　中国のサイトから選んで日本語に訳すほうですね。

陳　そうです。日本に紹介するために、もちろん私たち自身が取材することもありますけど、ほとんどは『人民日報』の記者や新華社の記者が取材して書いた記事をもとに編集、翻訳してネットに出すというのが、編集部の仕事です。留学して日本語を勉強した経験があったから、こういう仕事ができるわけです。

◇逆カルチャーショック?!

薛　皆さんのお話から日本留学の経験が大いに役立っていることがわかりました。これから少し角度を変えて、むしろそれと関連して、日本にいる時に「こういうところが日本なんだ」、逆に中国に帰ってきて「こういうところが中国なんだ」、または「中国も変わった」と思われることがあるとすれば、それはどういう時でしょうか。

徐　違いあるいはショックを感じたことがあるとすれば、こんなことですね。今はもう変わっているかもしれませんが、当時の日本、特に国立大学では、先生はみんな素晴らしいということになっていました。学生をまったく無視して自分の話ばかりしている先生もいらっしゃいましたが、それで学生ができるようになるかならないかということは、先生の教え方とは関係ない。先生の教え方がわからないのは、学生に理解力が足らないからだということになっていました。

　中国はちょうど逆ですね。学生はみんな難関を突破してきた優秀な学生です。外国語教育というのは技術を教えるような感じですが、そのクラスができるかできないかは学生のせいではありません。先生が悪い。もし学生全体の成績があがらないとすると、先生の方が悪い。今もそういうような状態です。私は一番運が悪いんですね。日本に行った時は学生で、先生の話がわからないのは私がバカなんですね。中国に戻ってからは先生なんです。学生ができないのはまた私がバカなんです（一同、苦笑）。こんなことを最初は一番強く感じました。

　まあ、そういう評価制度がいいのか悪いのかわかりません。日本も国立大学が法人化してから徐々に厳しくなってきてはいるようですが、完全に学生のせいにするとか、完全に教師のせいにするとか、どちらもあまりよくないことです

ね。ちょうど今日の出席者は理科系半分、文科系半分ですけれども、今、中国の大学教員に対する評価方法は、ほとんど理科系を前提にして考えられています。文科系の教員に対する評価はどこでも苦労しているという声があがっていますが、日本ではどうなっているのか、世界はどうなっているのかについても、ぜひ考えてもらいたいものです。

昔の日本の国立大学がよかったという意味ではありませんが、学問の自由という雰囲気は、おそらく今の中国だけではなく日本にとっても必要ですし、我々が留学の時に体験した、良き時代なのか悪しき時代なのかわかりませんけど、そういう時代の良さをもう少し取り戻したいというのが今の実感です。

李　そのほかで言えば、中国の大学では休講ができないんですよね。熱をだす以外に、教師はほとんど休むことができないんです。

徐　教師に対する要求が非常に厳しい。

李　講義が終わると学生による授業評価アンケートが実施されますが、六〇項目ぐらいチェック項目があって、その中のいくつかはかなかなか理解に苦しみます。たとえば「あなたはこの科目に対して興味がありますか。A興味がある、B普通、C興味がない」。学生が「興味がない」とCを選ぶと、先生の点数ががくんと下がるのです。

徐　教師に対する学生による評価を日本より早く実施したんですね。

李　六〇項目で点数をつけられるんです。

徐　それに、先生が授業に遅れるといわゆる「事故」が起こったかのような重大事になるんですね。

李　「事故」になってネットで公表されてしまいます。

徐　日本では先生は教室に遅れてくるのが当然です。えらい先生であればあるほど遅れてきます。

益岡　その意味では実は日本も中国の後を追いかけていて、そうのんびりはしていられません。国立はもちろん、公立の大学も国立の後追いをしますので――私は神戸市の大学ですので公立ですが――、評価等についてもかなり厳しいものがあります。それから先生がおっしゃった文科系の中でも特に人文系などはかなり逆風というか、厳しい風が吹いている。これもまた評価の問題です。学生からの評価もありますが、いろんな意味での評価を受けながら、それは大変な重圧ですけれども負けていられませんので、さらに努力していかなければならない。中国と同じとは申しませんけれども、かなり中国に近い状況になってきています。

留学体験の話とは違いますけれど、研究や教育の体制というのは、留学の問題を考える時、基本的な項目の一つとして、ぜひ現実のものとして話ができればいいなあと思います。

◇人的ネットワークの拡がり

益岡　ところで、人のつながり、人的ネットワークというのが長期の留学の場合には多くできるんじゃないかなと思います。そのあたりはいかがでしょうか。

徐　留学していた時の個人的なネット

ワークですね。例えば、私たちは学生を教えていますが、留学した当時教えていただいた先生とのネットワーク、その先生を通した学者同士のネットワーク、それから留学した時の同期の日本人学生、もちろん同じ時期に留学した者同士のネットワークも大事なんですが、これらは帰国後、仕事上の資源としてかなり利用しているし、また有効的です。

陳　私は少ないです。日本に留学した時のクラスメートとか先生とか、今ではほとんど連絡がありません。中国人のクラスメートで中国に戻った数人とはたまに連絡をとるけれど、仕事上の関係はないです。

張　私は、今でも続いている昔の指導教官や当時の先生たちとの付き合いは、人的ネットワークの一部となっています。例えば、私が中国社会科学院日本研究所に入ってから、母校の東北大学の経済学研究科と交流協定を結びました。また、もちろん私も働きかけたのですが、中国社会科学院と東北大学も二、三年前に協定を結びました。その結果、私は二年に一回、非常勤講師として東北大学に行っています。東北大の先生が北京にいらっしゃると、大体日本研究所を訪れてくださいます。私も日本に行くと機会さえあれば母校に行きます。

「ネットワークの一部」といったのは、中国社会科学院日本研究所は、研究レベルは別として地位は相当高いですから、大きな人的ネットワークが東京を中心に全国的に広がっているからです。上の方で言えば、例えば国会議員や各省の閣僚などの政治家の代表団が中国を訪れると、たいてい日本研究所を訪問します。例えば一番よく日本研究所にいらっしゃるのは加藤紘一さん（元内閣官房長官）です。また、うちの研究所では松下政経塾との間で、人的派遣を中心とした交流が一〇年前から続いていますので、研究スタッフのほとんどが松下政経塾で勉強した経験を持っています。今の民主党政権は、大臣クラスとか国会議員で、衆参両院合わせて松下政経塾出身者が五〇人近くになっているのではないでしょうか。このような母体もありますので、政治家、経済学者など、とにかく日本のトップクラスの方がいらっしゃると、よく付き合うようになってきたんです。

益岡　部分的じゃなく、非常に幅広く、本当のネットワークが形成されている。

張　だから東北大学はごく狭い人的ネットワークということになります。

益岡　でもやはり、日本にいらっしゃったことで、非常に大きなネットワークの基礎ができたという面もあるのではないですか。

張　そういうことも言えるでしょうね。私が帰国した時、文科系、特に経済学の博士号を日本で取った人はそれほど多くはなかったんです。日本では文科系の留学生は一般的に博士号を取りにくい。だから社会科学院に入る時、人材として受け入れてくれたんです。

李　日本にいる中国人が製作した『私たちの留学生活――日本での日々』（一九九九年秋から二〇〇〇年春にかけて中国全土で放送され大きな支持を集めたシリーズドキュメンタリー）というドラマの中で、一四年間学位が取れなかった李

仲生さんのこと（ドラマの最終回で彼は学位を取った）があって、そのあと増えたという話があるんですが、本当ですか。

張　その後ですね。だんだん文科系でも博士号を出すようになって、そのうち博士号を取った者が多くなって、中国に帰国しても優秀な人材どころかむしろ就職も難しくなっている。やはり時代が変わりました。

李　私は毎年必ず一回、日本の国内で開催される専門分野の研究会か学会に参加します。先生たちや同級生、同僚にお目にかかれるし、水俣病研究所や環境研究所などで共同研究をしているからです。なぜ毎年日本に行くかと言いますと、鳥の研究をしていて、世界的学会に行くと、たまたま英語が下手という点では日本人の先生と私たちが一つのグループになってしまうんですが、実は日本の家禽学会に出れば世界のレベルがほぼわかるくらいなんです。ですから、その後は日本に行けばいいと思っています。あとは、資料の収集が目的です。日本ではいろんな論文の日本語訳が大体二週間以内に出されるんですね。ですから日本に行く度に、それを全部集めて持ち帰って、中国で使ったりしています。今までいいことばかり言いましたが、日本への留学生はどちらかというと英語の能力が落ちているんですね。もし今の私が日本語と英語としゃべれたら、多分もうちょっと世界で活躍できたと思うんです。

◇なぜ日本でないといけないのか

張　私にとってもやはり日本への留学は本当に甲斐がありました。価値がある。なぜかと言いますと、世界で唯一、日本に行けば、東京に行けば、全世界の情報をすべて集められるからです。例えばアメリカ留学では、日本や中国のものはそれほど得られないと思います。多分中国人には、我々ばかりではなく、大先輩の魯迅先生の時代から同じような感じがあったんじゃないかなと思います。日本に行けば何でもすぐ得ることができる。

私の仕事で言えば、例えば、北京市政府から与えられた研究課題の一つに、北京とパリ、ニューヨーク、メキシコシティ、モスクワ、ロンドンのような大都市の国際化や都市計画などの比較があります。パリやロンドンがわかる人を探すのはすごく難しいんです。しかし、東京に行くだけで、ニューヨーク、パリ、ロンドンの資料は何でもそろっていて、詳しく分析ができる。これはすごいなあ、と思ったんです。でもパリに行って、東京の資料を必ずしもそれほど詳しく調べられるとは限らない。日本留学にはこういうメリットもあるんです。その研究をやっていて、やはり日本でよかったと思いました。

益岡　私の専門分野は言語学ですが、日本では当たり前のように、海外の、もちろん中国も含めてですけれど、情報が非常に早く入ってくるんです。しかもあまり偏りがない。ヨーロッパやアメリカはもちろんのこと、アジアの情報もほとんど入ってくる。この地域だけということではなく、最先端のものも偏りなくしっかりと見ていこうというのは、日本では当たり前になっているんですね。でも、

海外では案外そうでもないということなんです。そういう意味では日本は貴重な場を提供しているかもしれません。

張　中国で最初に出された『資本論』は日本語からの翻訳ですね。

徐　『共産党宣言』も日本語からです。

張　中国では、大体日本を経由して西洋の文化が入ってきた。

徐　特に近代以降ですね。

李さんが言った英語力については、特に我々の世代はそうかもしれませんね。日本語を習った人、あるいは日本に留学した人の英語は今一つです。もちろん、今の中国では英語教育が非常にしっかりしていて、今の世代はみんなできます。その代わり、最近では日本でもいくつかの大学が留学生のために英語だけで授業をしている。それは政策的にいい面があると同時に、悪い面もあると思いますね。英語を習うのであれば、なぜわざわざ日本に行く必要があるのか。そして日本へ行って、日本人の先生から英語で授業を受けたら、本当に英語が上達するのか。かえってそういう危惧があります。

日本へ行っても、英語の資料を読んだり、英語で発言することができるシンポジウムなど、英語で参加できるような場面があれば、つまり、日本へ留学したばかりに英語の力が落ちることにならないような環境を作ればいいんですね。授業とか、先生や学生との付き合いの中で、なぜわざわざ日本へ留学しないといけないのかということを実感できるようにする。そこをもう少し全体的な政策として考えないといけないのではないでしょうか。英語で授業すれば留学生を吸収できる、魅力がある、ただそれだけでは、学生を送り出す立場である我々から見ると、英語の勉強ならやはりアメリカやイギリスがいいんです。それでは、なぜ日本なのかという目的がかえってはっきりしなくなってしまいます。こういうことも少し検討する時期に来ていると思います。

益岡　今の日本はよく言われているように自信を失くしている。それが両面に現れていると言えます。一方では、グローバル化に適応しようとするさまざまな動きがありますが、他方では、外の、特に英語を中心としたグローバルなものになるべく触れないようにしようという意識、内向きと言うんでしょうか、ある意味では少し閉鎖的な精神、その両面があるように思います。外を一生懸命追い求めているようで、一方で矛盾しているようだけれども非常に内向きです。それはなぜかと考えてみたら、やはり自信のなさでしょう。つまり八〇年代が先ほど話題になったような、良くも悪くもかなり前へ前へと自信を持ってやっていた時代であったのに対し、その後バブルの崩壊があって、今の状況がある。そこが一つ大きいのかなと思います。そういう雰囲気が、例えば大学の中での教育の仕方、留学生の受け入れ方、あるいは留学生に対してどう教育していくかという問題などについても、かなり影響しているのではないでしょうか。この点をしっかりとらえ直すことが、日本のほうの我々の大事な課題だと思っています。

◇留学先の国の文化的刻印

薛　少し関連したところで、中国では同じ留学帰りの人でも、日本帰りと欧米帰りとでは、その評価に差があるのでしょうか。私の周りでも、例えば日本の留学を終えてから、直接帰国せずにいったん欧米に行って、それから帰国するという人がいます。きっと評価の差があるから、そういう行動を取ったのだと思いますが、皆さんはどのようにお感じでしょうか。もちろん日本問題を研究する者は日本帰りでしょうけど、それ以外の他の分野ではいかがでしょうか。今、李さんが、もし自分に英語ができたならばもっと世界的に活躍できたとお話しになりました。また、徐先生のお話にあったように、自分の子供、または自分の学生や周りの若い人に留学を勧める時には、日本留学と欧米留学のどちらを勧めるのでしょうか。そういう問題をどうお考えでしょうか。

向　実際のところ、僕のような工学系の者にとっては、全体的に見て確かにどちらかと言えば、日本帰りの人は出世が遅いです。我々は日本語を勉強していると、やはり日本の文化に多かれ少なかれ影響される。日本人は確実に仕事をしますが、あまり自己PRはしない性格だから、欧米留学の人からは成果を出すのが遅いと見られます。

薛　日本文化がある程度自分の中に根付いていて、それが行動様式にも影響を及ぼしているということですね。

向　実力はそれほど下でもないが、アピールするのが苦手なようです。

李　向先生がおっしゃったように、バイオテクノロジーの分野でも中間レベルは日本の留学生がかなり評価されるんですね。コツコツまじめにやりますから。でもトップクラスのエリートの中には、日本留学生は入りにくいんです。それは例えば、ある課題があったとき、欧米から帰った人は多少問題があっても「できます」と言うけど、私は遠慮がちに「やってみます」と言う。そうすると結局、向こうに大きいお金が回るんですね。それは絶対的な傾向としてあります。

　それから、先ほど英語のことを言いましたが、吸収力の一番強い時期に六年間日本で過ごしました。私の専攻は日本語じゃないし、文系でもないんだけど、日本語の勉強に本当に没頭したんですね。もう二〇年も経っているのでかなり下手になっていますけど。でもそれほど日本語を勉強した分、英語力は少なくとも留学する前より落ちていたんですね。それは確かです。

張　欧米から帰ってきた者か、日本から帰ってきた者かということですが、中国の今の体制としては日本から帰ってきた者は軽蔑されるほどではないけれど、昇進はなかなか難しい状態ですね。

薛　欧米と比べて、ということですか。

張　はい。「欧美同学会」（欧米同学会）という欧米から帰国した留学生の組織があるんです。しかし「留日同学会」はありません。李さんが今、会長を務めているのは「留日学人活動站」（留日学人活動センター）という組織ですが、最初にこれを作った時、私はちょうど国家教育

委員会に勤めていたんです。最初の構想は「留日同学会」でしたが、その後いろいろあってダメでした。「欧米同学会」の下位組織になってもいいという話もありましたが、結局「留日同学会」にはならなかった。国の政策ですね。日中関係もありますから。でもそれを話すと長くなるのでやめますが、とにかくこれは体制の問題です。

またもう一つ、向さんも李さんも言ったように、日本の習慣、日本の文化が染みついてしまったんです。例えば一つの問題や話題に関して、もちろん自分はわかるけれど、私にわかるなら他の人もみんなわかるだろうと、黙ってしまう。私が社会科学院に入った当初は「アジア太平洋日本研究所」だったので、私とアメリカ帰りの一人と一緒に入ったんです。一人は何でも目立つように、何か問題があるとすぐぱっと立って発言するが、もう一人の私はずっと黙っていた。多分みんなもわかっているから話さなくてもいいと遠慮して、日本人のように黙っているのが美徳かなと思いました。あるいは結論に関して十二分に自信がなければ言わない。でも欧米帰りの人は六割ぐらいの自信があればどんどん発言する。やっぱり張さんはだめだ、アメリカ留学の人はすごいなあと周りは思う。でも時間が経つとやはり印象は変わってきますが。

今は、日本研究所とアジア太平洋研究所は分かれている。だから、日本研究所はほとんど日本から帰ってきた者ばかりで、もうだめだとかは言われなくなりました。でも社会全体ではやはり欧米から帰ってきた者が優勢です。そういう感じがしますよ。日本から帰ってきた者は、みなおとなしくて礼儀正しくて……（一同、笑）。

李　北京大学でこんなおもしろいことがありました。研究室ではピンセットとかはさみとかが足りないんですね。そこで日本から帰った私の同級生が、次の日の実験に使おうと全部きちんと洗って消毒して置いて帰ったら、翌朝早く来た欧米から帰ってきた人が誰が消毒したかに関係なく全部使っちゃったんですね。毎日のようにそれが起きたために、日本留学生は計画通りに実験ができず、向こうは「早い者勝ちだ」と言って喧嘩になってしまいました。でもボスが全然その人たちを悪いと言わないんですね。そういうことですごくもめたことがありました。

益岡　皆さんのおっしゃったように、あまりおとなしくしていてはだめだというのもよくわかります。だから自分たちの考えをしっかり伝えるプレゼンテーションの力をつけようということになりますが、やはり長い間の文化的な伝統というか、価値観みたいなものがあって、六割しかわかっていなければ、たった六割しかわかっていないというふうに言うわけですね。そういうところが、今のグローバル化の時代の中では若干不利に働いている。それではいけないと日本でも随分言われてきてはいますが、これは本当に長い間培った感覚ですからそう簡単にはいきません。これからは六割であっても十割わかっていると言えるかと問われたら、私たちはそういう価値観というか文化なので、やはり六割は六割だという気持ちが強い。

◇留学生をつなぐ活動

薛　最後に、日本留学生の留学後のつながりについてですが、まだ「同学会」とまではいかなくても、元日本留学生同士のつながりや連帯感というものがあって、学術支援の活動も行われていると思います。具体的にどのような活動をしているのか、お話しいただきたいと思います。

李　一九九二年一一月に「留日学人活動站」（留日学人活動センター）を設立したのですが、その当時は「六四」の後で名前に「会」をつけることはできず、それで「站」（ステーション）ということになりました。とにかくみんなで集まって、政治は語らず、政治問題にも触れず。この十数年間、ただ友情をつなげることと、仕事面でお互いに助け合うということで今までやってきました。毎年、春の遠足会と年末の総会が一番大きなイベントです。総会では、必ず何かのテーマでシンポジウムを開催します。それから、一年間の活動報告があって、夜はみんなで集まって交流会が行われます。日本からはいつも日中友好会館の代表が参加され、在中国日本大使館からも大使一行がいらっしゃるし、中国教育部、または民間組織からもお客さんがいらっしゃるのです。

二〇〇九年の大きな仕事は二つありました。一つは、元留学生の家族三〇人からなる代表団を連れて日本を訪問したこと、もう一つは岐阜市が選んだ優秀な中学高校生一七名を活動站の会員（希望者）の家に二泊ホームステイさせたことです。これからはやはり、若者の交流を深めることを中心にやっていきたいと思います。

会員は一二〇〇人ぐらいで、写真入りの名簿があります。七割以上の人が理科系で、しかもほとんどの人は大学の先生です。就学生や留学期間が一年以内の人、日本の研究機関または大学に在籍していなかった人は入っていません。

この活動站とは別に、欧米同学会の下に日本留学生の支部があって、私も含めみんな入っています。中国工程院副院長の旭日干という偉い方が日本留学生支部の会長で、私も徐先生も副会長を兼任しています。とにかく喧嘩をせず一緒に何かやろうということで、今度（二〇〇九年）の一一月二三日にみんなで天津の開発区を訪問することになっています。日本留学生支部から二〇人ほど、活動站から十数人、私も参加します。

矛盾を起こさないこと、社会問題を起こさないこと、それに政治に触れないこと、これらを守ってやっていこうと思います。年会や総会になると、日本大使がいつも一升瓶を一〇本ぐらい持ってくるなど大事にしてくださるから、羨ましがられているのです。他の国の留学生の場合、集まっても大使が来ることはありませんから。毎年お越しくださるので、本当に親しみを感じます。

簡単な雑誌も発行しています。

徐　いわゆる「同人誌」ですね。

薛　活動の場所はどこかにありますか。

李　清華大学の近くに事務所があります。そこには日本から寄付された辞典や本が一〇〇〇冊ぐらいあります。専門書

ではなく一般向けの本が置いてあって、図書館のような感じです。日本大使館の委託を受けて、私たちが日中科学技術交流センターという名称の施設を運営する形で、大使館がある程度、家賃も補助してくれています。設立からもう一七年経ちますが、みんなとても頑張っています。

徐　若いメンバーに参加してほしいです。

薛　陳さんもぜひ入ってください。

張　全国的な組織以外に各大学にはそれぞれ校友会があって、東北大学は中国校友会があり、ほかに東京大学とか神戸大学とか、いろいろありますよ。

李　九州大学にもあります。

徐　大学別の同窓会ですね。必ずしも中国人だけの同窓会でなくて、例えば神戸大学の同窓会には日本人も含まれています。北京にはたくさんの日本人の神戸大学卒業生がいるし、上海にも卒業生がいますから。北京では一か月おきに神戸大学同窓会の定例会を開いています。そういう元留学生の会のような人的ネットワークのほかに、中国側のいくつかの大きい拠点もあります。例えばこの北京日本学研究センターの卒業生、これは大平学校時代以来ほとんどが留学経験者です。それから皆さんが日本へ行く前の予備校、中国赴日本国留学生予備学校もあります。予備学校は二〇〇九年に三十周年を迎え、記念式典には一三〇〇人も集まったそうです。

薛　長春の東北師範大学内にありますね。

徐　式典には、中国教育部の副部長（副大臣）まで出席して、日本からも文部科学省の審議官もいらっしゃったそうです。こういったネットワークも今できつつあるんですね。だから日本政府が留学生三十万人という目標を達成しようとするのもいいんですけれども、先ほど薛鳴さんが触れられた「日本に対する満足度」を高めるためには、留学から帰国したらあとはもう知らないというような姿勢ではなく、留学経験者のアフターケアとネットワーク作りとを重視していかなければならないと思います。そしてそれを人的資源として活用すれば、おそらく日本に対する理解と満足度がかなり上がると思います。それこそまさに日本理解のベースとなっていくでしょう。

李　付け加えると、元留学生に対してはビザをもう少し簡単に出すようにしてほしい。帰国してから、みんな親しみを感じながら日本大使館に行くでしょう。ところが、領事部の窓口で以前と同じように冷たくされた。帰国して初めて行った時はがっかりしたけど、今は大分対応がよくなりました。

薛　そうですね。

李　九州大学には在中国九州大学同窓会があります。また九州大学の北京事務所もあり、事務員が数人いてさまざまな活動をしています。私も九大の卒業生です。

益岡　日本の大学も、少しずつですけれど、事務的にではなく本当にしっかりと受け入れ、交流をしていこうという気持ちが行動に出てきていると思います。

李　東京大学、北海道大学、九州大学、千葉大学、早稲田大学、広島大学、神戸大学、一橋大学、ＪＳＰＳ（日本学術振興会）、ＪＳＴ（科学技術振興機構）、理化学研究所など日本の大学または研究機関が北京に事務所を持っています。政府

に正式な事務所として登録してあるもののほかに、登録されていないものもあるんですけど、一応事務所があります。

益岡　今日は中国の大勢の先生方がいらっしゃって、いろいろなご経験やご意見を伺うことができたのですが、お話しくださったことを今の時代の社会のさまざまな方面で活かしていければと思います。これからは真の交流が求められる時代になると思います。留学ということで言えば、中国から日本への留学がさらに盛んになり、日本からも中国への留学が一般化し、中国と日本の間の人的ネットワークが広がっていくことを大いに期待しています。

薛　生き方というと、まさに十人十色で人の数だけあると言えますね。一方、それは社会と時代と経験によって規定され影響される面も持っています。今日は「留学」という共通の経験をもつ皆さんに多岐にわたってお話しいただきました。お話を通して改革開放政策が実施され始めた頃からこの三〇年来の赴日留学生の歩みを見ることができたように思います。「留学という生き方」が中国社会において確実に力を発揮し、今後もこのグローバルな時代にあっていろいろなレベルの交流にますます貢献していくことを確信し、かつ期待したいと思います。今日はたくさんの有意義なお話を、また益岡先生にはいろいろと有益なコメントを本当にありがとうございました。

（二〇〇九年一一月一四日）
（テープ起こし＝宮田千信、原稿整理＝薛鳴・砂山幸雄）

〈1〉岩男寿美子・萩原滋『日本で学ぶ留学生――社会心理学的分析』勁草書房、一九八八年、一六九―一七六頁。